白楊ヶ丘 札幌

No.26 平成22年6月18日

白楊ケ丘同窓会札幌支部

（〒060－0061 札幌市中央区南1条西11丁目 TS札幌ビル 公認会計士・税理士 酒井純事務所内）

雑感

支部長 高島 巌

陽気のまい日が続いておりますが、皆様お元気でお過ごしのことと存じます。

来年をもって八十歳になるわけですが、健康に寿命を重ねられてきたことに感謝の気持ちで一杯です。

札幌・西野の奥、手稲山の尾根の頂き近くまで登りつめた所にある看護老人保健施設が職場ですが、年齢に相応しい閑職で、まあ、ご機嫌な毎日と言ったところでしょう。それにしても、八十歳になるまで月給トリを続けてこられたとは、何とも有難いことだと思っております。

養生法などといったことを考えたこともなく、目一杯、食いたい放題、飲みたい放題、わがまま一杯の日常ですが、幸にも病知らずで今日まで来られたのは、何のせいだったでしょうか。

ヴァイオリンの先生に、お前は身体が大きいからと、ビオラを持つことをすすめられ、以来ウン十年、アマチュアオーケストラのビオラパートを唯一の趣味として続けて来ましたが、毎週日曜日はアンサンブル・ラークの、また月曜日は小樽市民オケの練習に欠かさずに出ており、これが老化防止に役立っていると思います。

音楽のほかは、自家製ビールの醸造がもう一つの趣味で、ここ暫らく、ビールは買ったことがありません。一回に大瓶四十本ぐらい出来ますので、一ヶ月は持ちます。デパートにキッドが売っていますので誰にも簡単に作れますが、意外に知っている人が少ないように思います。結構な味に仕上がりますよ。瓶詰めの時に、泡の発生のための砂糖を入れるのですが、この時密栓する必要があり、したがって、樽からジョッキになみなみというわけにはいかないのが玉にキズです。

自家製ビールはアメリカで大はやりでした。どこへ行くのも車の国ですが、酒気帯び運転が危険だなどと云うこともなく、皆、大ぴらに赤い顔で運転していたようでしたが、小生の経験では、少し入るとやはりハンドルさばきが甘くなるのは避けられないようでした。

ビールと音楽のほかにはこれといったこともない平穏な毎日の連続ですが、今の職場、百歳を超えた人はいないけれども、全員が私の年より上で、それでもほとんどトラブルのない日々の連続で助かっています。

緑の濃い手稲の尾根の頂の春の美しさは、暫らく我を忘れるほどで、息をのんで風景に見とれる毎日で、今少し長生き出来そうな感じがします。

親睦会などの運営

白楊ヶ丘同窓会 会長 三ツ谷 富夫（第五十八期）

第三十回白楊ヶ丘同窓会札幌支部定期総会・懇親会のご盛会を心からお喜び申し上げます。同窓会員による講演会、懇親会の開催・運営など同窓会活動に携わっておられる幹事の皆様のご苦労に心から敬意を表します。また、札幌支部の方々には本部の総会・懇親会にもご出席戴いておりますことに厚く御礼申し上げます。

昨年は六月の札幌支部を皮切りに、九月の本部、十月の仙台、東京、大阪の総会・懇親会の全てに黒田校長、幹事長とともに出席させていただきました。各支部での運営の苦労話などをお聞きした記憶を辿りながら、この一年間を振り返ってみたいと思います。

札幌では六十九期女性会員の講演をお聞きしましたが、本部副会長も同期生として出席しており、その後の同期会でも盛り上がったことと思います。私も二年五組のクラスメイトに卒業以来の再会となり、彼女には函館の同窓会へも出席を戴きました。出席者の確保に腐心していることでもあり、幹事の方に感謝を申し上げます。

七月に同窓会名簿を作成することとしました。発行につきましては、個人情報保護法への対応などについて懸念する意見もありましたが、将来の周年事業をはじめ各種事業の実施には必要不可欠のものであるとともに各支部から強い期待・要請もあることから、専門業者へ依頼しました。会員皆様のご協力によりまして六月末にはお手元に送付される予定となっております。なお、表紙は四十三期の葛西善一郎先輩に書いていただいた「白楊」で飾るできたことができたことを嬉しく思っております。

九月の本部総会は、月曜日開催となりましたが当番幹事をはじめ各期幹事のご協力により、ほぼ前年並みの出席者を確保することができました。当番期の幹事と幹事長が最終決定することとしている余興

の時間帯を、三年前から同窓会員も多数構成員となっている「上磯吹奏楽団」にお願いし好評を戴いておりますが、今回は翌月に北海道代表として「全日本吹奏楽コンクール」への出場が決定してるなかでの出演となりました。舞台設営の状況から半数程度での演奏を余儀なくされますが、校歌・同窓会歌の伴奏のほか、事前のリクエストにも対応していただいており、特にロドリーゴの「アランフェス協奏曲」第二楽章をトランペットのソロで聞けたことが印象に残っております。

十月の仙台では、黒田校長が「中部高校の現状」として講演されました。自ら「新聞に見る函中の昨今」のタイトルで平成二十年五月から二十一年八月まで記事を二十ページに集約した資料を配布され、映像を用いての充実した五十分間でした。

東京では会場が変更され、地下鉄の出口から多くの会員が配置され会場への誘導に当たっておられました。大都会での二百名を越える懇親会場の確保・運営はそれだけでも大変なものだと改めて感じました。平成十七年十月の創立一一〇周年記念祝賀会で祝杯の音頭を取られた三十五期の佐藤洋先輩が今回も出席されることが式次第にあったのですが、元気なお姿を拝見することが出来ず残念でした。散会後、ミニ同期会を楽しませていただきました。

大阪では由緒ある建物での開催が続いており、この会場へ入ることそれ自体に感動を覚えます。同期生による前夜祭を楽しませていただき、懇親会ではほぼ全員のテーブルスピーチで盛り上がりました。九十七期の若い会員が今回も出席されておりました。

本年三月一日に全日制課程二三五名定時制課程四十七名合計二八二名の卒業式が行われました。全日制卒業式後の卒業記念祝賀会・同窓会入会式におきまして第一一二期新入会員をお迎えしましたが、遠路出席を戴いた東京支部長ともども各地での同窓会への出席を要請しました。定時制の卒業式では、八十五歳の女性が卒業証書授与に併せて特別表彰を受けられました。戦時中家庭の事情で進学を諦め、夫を送って八十歳を超えてからの高校生活を成就された卒業生には、誰にも増して大きな賞賛の拍手が贈られました。

三月二十四日は年度の終業式の日で、毎年その夜に教職員の退職・人事異動に伴う送別会が行われますが、今回黒田校長が札幌北高等学校へ異動されることとなりました。栄転とは申せ、二年間での交替は短すぎるのではないかと考えるのは私だけでしょうか。いろいろとお世話になり有難うございました。今後のより一層のご活躍を願うものです。

新学期が始まり、四月八日に全日制課程二三八名の入学式が行われました。新校長は旭川西高等学校から来られた小林雄司先生です。当日、いろいろ意見交換の中で同窓会へのご指導ご尽力をお願いしたところであります。本部・支部それぞれいろいろと課題を抱えておりますが、連携を密にしながらよりよい同窓会にしたいと思っております。

最後になりますが、白楊ヶ丘同窓会札幌支部のますますのご発展と、高島支部長はじめ札幌支部会員の方々のご健勝ご多幸を心から祈念申し上げて挨拶とさせていただきます。

歴史と伝統の函中へ

校長　小林雄司

白楊ヶ丘同窓会札幌支部の皆様には日頃より本校の振興と教育活動へのご支援、ご高配を賜り、厚くお礼を申し上げます。

この度四月一日付の人事異動により、国内最北の理数科設置校、かつ庁立高女の流れをくむ百年を超える伝統校だった上川管内、旭川西高校から赴任して参りました小林です。前任の黒田校長とは違い本校の同窓生ではありませんが、変わらぬご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。

前任校は上川の雄大な大雪山系のもと、石狩川がもたらす豊穣な大地と田園地帯が広がる伸びやかな環境のなか、生徒達は素直で明るく活発で、素晴らしい学校でした。

今回はそれにも増して本校は明治二十八年に創立された道内でも札幌南高校と並ぶ屈指の伝統校であり、しかも自然環境は内陸の旭川とは大きく異なりますが、私自身、渡島地区は一般教員時代に函館西高校、教頭時代に恵山高校と今回で三度目、百年を超える伝統校は函館西高校、式典をした小樽潮陵高校、旭川西高校と今回が四度目の勤務にな

ります。それぞれに学校の違いはあるものの伝統の重みと同窓生の熱い思いなどはそれなりに様子はわかってはいるつもりではいますが、身の引き締まる思いで赴任してまいりました。私が赴任した学校は九校で、その他、振り出しが昼間定時普通科の北見仁頃高校、当時は八間口あった静内高校、理数科を初めて知った札幌啓成高校、校長採用後、部活動でも勉強の面でも活発だった雄武高校など、小規模校から大規模校、基礎基本の必要な高校から進学重視の高校、それと幸せなことに北海道を取り巻く三つの海、太平洋、日本海、オホーツク海と見てきました。ただ変わらないのはどこも生徒が明るく待っててくれたことです。

そんな中、まだまだ本校の様子を垣間見ているような状況ですが、四月からこれまで、一年生の初々しくも溌剌とした姿、高体連、高文連、高野連の大会にむけて、活躍が期待できそうな部活動での生徒達の日々の頑張る様子、また生徒会活動をはじめとした様々な活動での生き生きとした生徒達の取組の様子、さらには様々な場面で生徒達の主体性を大事にしながらも熱心にサポートしている先生方の様子を見て参りました。その姿はまさに生徒・教員間での厚い信頼関係のもと、「師弟同行」の精神にあふれた良い雰囲気の学校であると強く印象を受け確信もいたしました。こうした良い学校の環境を大事にしながら、私の今までの経験を踏まえて、百十五年目を迎えたこの函館中部高校で、新時代を担うにふさわしいリーダー的人材育成にむけた新しい学校づくりを目指していきたいと考えています。そのためには何が必要で、伝統として何を残し、何を変えていくべきかを真摯に先生方とともに考えて、先ずは力強く踏み出していければと思っているところです。その時、そこで何よりも必要と感じているのは本物志向の教育をするということです。この点からいえば、特に同窓生の皆様方には失礼な言い方かも知れませんが、生徒達の生きた見本、目標として、お力添えを仰がなければなりません。改めてご協力をご依頼することにもなろうかと思いますので、その時は何卒よろしくお願いいたします。生徒達の将来にむけて、活力ある同窓会があることは大変心強く感じられ、こういう本校に校長として赴任できましたことに感謝をすると同時に、精一杯責務を果たさなければならないという思いで、微力ながらも努力いたす所存です。

さて、平成二十一年度の本校の状況ですが、進学状況については合格者延数で国公立大学九三名（四名増）、私立大学一七〇名（三四名増）等、最近は全体としては右上がりの上昇傾向になってはきています。しかし本校は単に合格者数だけではなく内容が問われていますので、更なる向上を目指していく必要があります。生徒の能力を最大限に引き出すためにはどうするのか。東大・京大をはじめとして早稲田・慶応などの難関大学や、医進類型指定校に見合う医学部医学科への進学なども視野に入れていかなければなりません。

また一方で部活動の状況ですが、文武両道を標榜するに相応しく加入率が九二％と非常に高く活発であり、その中で各種大会で全道進出を果たしたのが、男子バスケット、陸上、剣道、弓道、男子ハンドボール、卓球、バドミントン、水泳、音楽、画会、書道、写真、ＥＳＳ、パソコン研究、放送など数多くあり、さらに全国大会まで進んだのが水泳、放送でした。リーダーとしての資質を育成するという本校の使命からして、勉学に、部活にと、文武両道に向けてこれからも生徒達には高校という時代を大変だけれどもしっかりと挑戦させていくべきであり、生徒達もそれに応えてくれる高い志があるものと信じています。

さて話しは変わりますが、同窓生の皆様にとっては、高校生活はわずか三年間だったとはいえ、心理学的に「疾風怒濤の時代」ともいわれる多感な日々を、同じ時代に、同じ校舎で、同じ時間を共有し暮らしてきた思い出はなによりもかけがえのないものではないでしょうか。それはどんなに時代が変わり、住む場所が変わり、たとえ校舎が変わろうとも母校を前にすれば、その時代の息吹とともに自由な校風の中いつまでも変わらぬ「白楊魂」、自主自律・自由闊達・質実剛健・堅忍不抜・不撓不屈の精神を感じることができるはずです。函館から離れている同窓生にはより一層強いのではないかと拝察いたします。このような熱い思いの同窓生の皆様に対して本校がいつまでも函中の誇りと愛情を持っていただける学校となるようこれからも努力してまいります。同時に同窓生

の皆様には、時代の趨勢とはいえ、少子化による最近の高校の再編統合、間口減の動きを見るにつけて、こうして本校が母校としてあり続けることの幸せを感じて、一層の応援をして頂ければ幸いです。

機会があれば、何かの折りにでも遠慮せずに是非ともご来校していただき、後輩たちのために忌憚のないご意見や励ましなど、ご指導をしてくださいますよう、よろしくお願いを申し上げます。

最後になりましたが、白楊ヶ丘同窓会札幌支部の同窓生の皆様方のご多幸とご健康をお祈りするとともに、本校同窓会札幌支部の益々のご繁栄を祈念いたしまして、私の自己紹介並びにご挨拶といたします。

東京支部だより

白楊ヶ丘同窓会東京支部長
安田康次
（第六十七期・昭和四十年卒）

札幌支部の皆様、こんにちは。

今年は、昨年に引き続き、三回目となりますが、ご招待有難うございます。

東京地方、春は桜の開花が早く三月下旬には満開に近い状態になったにも係わらず、四月には雪が降るという異常な天候がありました。北海道には梅雨が無いと言われておりますが、最近それに近い気候があるようにも聞いております。これも地球温暖化の影響でしょうか。このような不安定な状況は景気にも関係するのか、いまだ景気回復の兆しも見えてこず、失業率も五%台と大きく、新卒者の雇用も大変厳しいと聞いております。

そんな中、札幌支部定期総会に出席できる事、大変うれしく思っております。又、この機会に中々会えない同期（六十七期、四十年卒）のメンバーとの懇親も楽しみの一つです。

ここでこの会報をお借りして東京支部の近況を書かせていただきます。

昨年十月に三十四回東京支部親睦大会を、黒田校長先生をはじめ、本部、支部及び在京他校同窓会の役員の方々のご出席をいただき、総勢二百二十三名の盛大な会を開くことが出来ました。

今年度は四月二十六日に評議員会を開催させていただき、二十二年度の事業計画を承認いただき活動しております。主だったものをご報告させていただきます。

① 東京支部事務所移転

長年五十二期福津先輩の会社会議室をお借りして理事会などを開いておりましたが、いつまでもご迷惑をおかけする事も出来ず、二十二年三月末日をもちまして、移転しました。中々良い場所が見つからず、下記に仮事務所として運営する事としました。

（最後に住所、電話番号を記します。）

② 東京支部親睦大会

今年は昨年と場所を変え、十月三十日(土)午後二時よりお茶の水「ホテルガーデンパレス」で八十期生が企画。インターネットによる母校との二元中継及びビデオレター等を検討中です。楽しみにしていてください。親睦会に先だち、九月に「東京白楊だより」三十三号も発行いたします。札幌からのメッセージ等お待ちしております。

③ 東京支部ホームページの充実

若手スタッフを中心に検索エンジンで支部ホームページにヒットしやすくし、ソーシャルネットワーク内で活動している同窓生コミュニティーとのリンク、函中卒業生の著作、創作活動の紹介、PRなど積極的に進めて行こうと思っております。何かありましたら、是非ご連絡下さい。

④ その他にも母校、本部、他支部及び他校同窓会との交流を積極的に行っており、特に東校、西校とのゴルフコンペ（函館巴会）は毎年四月に開催されており、今年は数年ぶりに優勝する事が出来ました。最近若手のゴルフする方が少なく、年配の方のリタイアなどで、悩んでいた、同窓会ゴルフコンペ（ポプラ会）も久しぶりに再開、会員同士の交流の場として楽しい会にしていきたいと思います。

⑤ 今年度だけの問題ではないのですが、会員の減少（会費納入者）に歯止めをかける有効な手段が見つからず、大きな悩みの一つです。

東京支部では、新同窓生（三月卒業生）を親睦大会

に招待し、同窓会の良さをアピールしながら若手会員の参加を呼びかけております。

⑥　東京支部長人事の件ですが、早いもので、今年十月で、一期三年の任期満了となりますが、評議員、理事の賛同を得、次の任期である平成二十五年まで引き続き支部長をさせていただく事になりました。今後とも宜しくお願い申し上げます。又、同時に副支部長として、白川正広氏（七十六期、四十九年卒）を新たに選任し、従来の松田、梅田、加納氏に加え副支部長四人体制で会の充実を図る事としました。

最後になりますが、白楊ヶ丘同窓会札幌支部の益々の発展と、高島支部長始め札幌支部の皆様のご健勝を心から祈念申し上げ、再会できるのを楽しみに、ご挨拶とさせていただきます。

白楊ヶ丘同窓会
東京支部事務所
住所　〒338—0012
埼玉県さいたま市中央区
大戸2—19—10（安田方）
電話・FAX
048—852—0988

同期会紹介

四十七年後の芥川

田中英昭
（第六十八期・昭和四十一年卒）

古い書物を引っ張り出していたら、函館の森文化堂（懐かしい！）のカバー紙のついた色褪せた文庫本が出てきた。芥川龍之介著の「西方の人・侏儒の言葉」。昭和三十八年十一月十日発行、定価一〇〇円とある。発売後すぐに買い求めたとすれば、私は中部高校の一年生だ。四七年が流れている。そのころ私は別に文学青年というわけでもなく、いたずらに懐疑的な青臭いあの時期をやり過ごすスタイルとして、異端やアウトサイダーを気取る手合いに芥川は格好の形而上のファッションであったのかもしれない。芥川の遺された写真には、正面を鋭く睨みつけたり、軽く顎に手を添えて斜めを見遣るといった、いかにも意味ありげなポーズがみられる。そして私にとって芥川は、何よりも自殺によって直ちに自らを古典化し、その完成された様式美で人を呪縛するプロトタイプの嚆矢であった。

大正時代に文芸春秋が創刊されて以来、遺稿として死後まで巻頭を飾った「侏儒の言葉」には、芥川的な、余りに芥川的なシニカルなアフォリズムが並び、犇いている。（ちなみに同書に収められた「続・西方の人」は自殺の前日まで書かれた正に絶筆である）

「自殺しないものはしないのではない。自殺することの出来ないのである」。「死にたければいつでも死ねるからね。ではためしにやって見給え」。文学者は心理的ストリッパーと言った人がいる（ついでに言えば芥川は、宗教を精神上のマキャベリズムといっている）が、純文学の大家というのは、どんなに強がり悪ぶっても要するに根っこのところで傷つきやすいロマンティストなのだ。それもそのはず、実利や効率から離れた心象の世界で、人を感動させたり、驚かしたりして生きがいとするのが彼らなのである。作品でそれをしているうちはいいが、妥協を知らない豊饒な才能は、いつの日か自分自身を作品にすることを企む。つまり、ついには死ぬことが生きがいになるというパラドキシカルに直面し、自死をもってそれをしてしまうのだ。すると残された作品に生きがいが乗り移って、永遠を懸想する命が吹き込まれる…。

想えば、中部高校のころ典型的な「三号雑誌」を作った。ガリ版刷りの一応、同人誌の体裁で、私はニヒリズムやデカダン、実存思想のマネゴトにかぶれた姿を恥ずかしげもなく晒していた。「三号雑誌」は三合呑むとつぶれるという粗悪な酒に引っ掛けて戦後の混乱期にはエログロ満載の「カストリ雑誌」というのが出没したようだが、こちらは「虚人群」というタイトルの如くめっぽう固い内容であったが、キチンと三号で終わった。しかし酒三合のほうは四十数年来、毎日続いている。

芥川はまた「遺伝、境遇、偶然—われわれの運命を司るものは畢竟この三者である。」と語る。どこか別稿で、だから自分の責任は四分の一

だけと嘯いていたような気がする。昨今はすべて遺伝子の所業だという説もあったりするが、境遇や偶然を大きく「時代」と括ると、まことに生まれた時代からは逃れがたい。特に戦後の復興と停滞を象徴するかような昭和二十二年生まれの身としては、世間はまことに多くを規定してくれた。曰く団塊、曰くベビーブーマー、曰く金の卵、曰く受験戦争、曰く学生運動、曰くノンポリ、曰く企業戦士ｏｒｅ歯車、曰く終身雇用やがて早期退職……

一方で芥川は言う……

「運命は偶然よりも必然である。〝運命は性格の中にある〟と云う言葉は決して等閑に生まれたものではない」と。どんなに没個性の世代論の修飾詞に囲まれていても、そして三者に司られながらも、結局は一個だけの性格が選んだ、一回限りの人生がそこにある。

「国」の運命も、この言葉に重ねてみる。特に日本近代史の、この三者に司られた一定の期を画しながらの輪廻が、この先も変わらない国民の性格によって繰り返されるなら、もっともっと厳しい運命が待ちうけることになる。私の退屈な妄想が沸き起こってくる。

この国の近代は、不思議と四十年刻みで興亡を繰り返してきた。維新から日露戦への大躍進、そして敗戦への転落、戦後の驚異的な経済の復興と、四十年ごとに浮き沈む大波を描き、今はバブル崩壊のあと長期不況が続く衰退期の半分を過ぎたところだ。

倒幕の炎が燃え上がってから四十年後に日露戦争の終結するまでに人口も倍以上に増えたが、西欧の侵略に対する瀬戸際の危機対応にはまことに驚嘆させられる。しかし戦後の講和を弱腰として大乱闘を演ずる日比谷焼き討ち事件が、その後の国運の転換点であった。日本にカネを貸した国の水入り仲裁による終戦を大勝利と勘違いした、この暴徒化した群集は、その更に四十年後、東京湾に浮かぶミズリー号の上で日本が壊滅的敗北による降伏文書にサインをすることは、もちろん誰も予想しない。

日露における日本の果敢な戦闘能力は欧米に日本警戒論を醸成し、米国は日露戦後まもなく日本を仮想敵国とし、開戦から占領までを計画するオレンジプランを練り上げる。日露から敗戦までの四十年の中間期には、米国で排日のための移民制限法が成立、ついで日本の在米資産を凍結した。黄禍論が広がる一方、国内では白人への不信感が増幅されていく。第二次大戦後の繁栄の背景に日米同盟があるごとく、日露戦争を有利に進める大きな援軍としての日英同盟があったが、この同盟もこの頃米国により廃棄され、日本は一直線に孤立化の道を突き進むことになる。

第二次大戦から四十年後の象徴的な出来事はプラザ合意である。戦後の焼け跡からの復興は、明治維新後の文明開化、殖産興業の必死のパワーに勝るとも劣らぬ大事業だ。やはり中間期に開かれた東京五輪では一兆円を超すインフラ整備をした東京の姿が、二十年前の廃墟を重ね合わせて奇跡以上の復興ともてはやされた。その後も無敵の高度成長を遂げ、その極みがプラザ合意で、国力は二倍になった。しかしうらを返せば、冷戦に勝利した米国が、そのコストを冷戦で一番恩恵を受けた日本に負担を迫ったのである。円高不況にはならなかったが、余ったカネがバブルを生んだ。米国の不動産を買い漁る様はパールハーバーのデフォルメを髣髴させる。そして経済敗戦である。それからの日本は失われた〇〇年が続くこの体たらくである。中間期の二〇〇五年には日本開闢以来の人口減少が始まった。今は過去の蓄えで何とか持ちこたえているが、やがて貯蓄率はゼロになる。この潮流は二十年後の何を占うのだろう。そのころひょっとして人為的なインフレの挙句、あの壊滅的敗戦のようなどん底の破綻状態が来るというのか。そして果たしてそこから又驚異的に這い上がるというのだろうか。

日露の戦果やバブルのようなものに前後不覚に酩酊し、平常心を失うのは日本人ばかりではないだろう。しかしかの国のことはいざ知らず、必然の運命をたどるのも無理からぬわが国民の同質的性格はどうだろう。情緒的にして、傲慢と自棄が隣り合わせに棲む性格は――。日米が戦闘状態に入ったとき、多くの文化人は、軍に強要されるでなく自らの率直な感懐として開戦に感動し、むしろ晴ればれと賞賛した。戦争突入自体が特攻隊であり、すでに開戦時に玉砕を覚悟する詩文が詠まれた。そして無条件降伏した。

再び、遺伝と境遇・偶然が重なり合って運命が決せられるという。団塊世代は

たまたまオキュパイドジャパンに生まれた。しかし勝ち馬に順応するオキュパイドジャパン状態は団塊世代に限ったことではない。荏苒月日は流れ、プラザ合意のあと第二の敗戦を経て、日本改造を推し進めたものも……その米国自身が国防総省の未来予測レポート「アジア二〇二五」で、日本が日米安保を脱し、発展する中国の傘下に入る可能性を描く……いかに異文化の受容に長けた遺伝子を持つとはいえ、オキュパイドジャパンの遺伝子が市民権ならぬ国民権を得つつあるとしたら……失われたのは歳月ではなく、日本の独立なのではないか。

なんだか話が大きくなってしまったが、人間年をとるにつれ、歴史や宗教に近づくというが、私の場合、先ずは身近なところで近代日本史に興味津々なのでこんな原稿になってしまった。

そんなきょうこのごろ、懐かしの函中の同期会を盛大にやろうという話がもちかけられた。卒業後四十五年、離ればなれの同期が冥土の土産に語り合おうというわけだが、私としてはこれからが人生の佳境だと思っている。還暦も過ぎ、まみれた世塵を振り払えば、忘れていた風景画が広がってくる。そこには色濃くロマンの漂う街をあてもなく彷徨した多感な函中生活も揺れている。あのころあの学校には、経済・社会のさまざまな帰属から自由に遊弋する文化の伝統が息づいていたような気がする。三高の函館中学版というと言い過ぎか。

さて、これからまた函中時代の黄ばんだ在庫をひっくり返して、時には頭髪黒々としたあの頃の自分にもどったりしながら、更に過剰な妄想を紡いでみよう。

同期会紹介

自分の生き方に影響を与えた高校時代

北海道議会副議長
平出陽子
（第六十九期）

私の中部高校時代（一九六四年四月～六七年三月）は、世に言う団塊の世代であり一学年一〇クラスで大勢の生徒でむせかえっていた。しかも小学区制の時代であったので、中部高校を中心に近隣に居住している生徒（例外は函館本線沿線の中学校からある一定の割合で合格可）が通い、まぁそこそこ中学校で点数がとれていると合格できる学校であった。今では中部高校は有数の進学校であるが、当時は勉強一筋の生徒もいれば、部活命の生徒もいるし、学校での姿がたまにしか見受けられない生徒、生徒指導担当泣かせの生徒もいたようで、それはそれで卒業後の話題は尽きない高校生活を送っていた。

私は一応大学進学を考えていたので、それなりに勉強していたつもりであったが…。部活も図書部、華道部、茶道部、水泳部に属していたことは覚えているが、どの部の活動も三年間続けた記憶がないので、履歴欄になんとか書ける程度の活動であったのだろう。可もなく不可もない高校生活であったが、でもたぶんこの高校生活は、その後の私の人生に大きな影響を与えた三年間であったような気がする。

それは初めて『死』を身近に感じて、自分の生き方を問うことができた時期であった。

高校二年生の時、六人の仲のよい女友達がいていつも一緒に行動していた。当時の私はなかなか友達とうち解けにくい子供だったので、六名の友達はかけがえのないものに感じていた。その中の友がおぼれて亡くなった事故があった。夏休みにクラス行事（？）として海水浴に行く計画が持ち上がり、運動が苦手な私も唯一誇れるのが水泳だったので、楽しみにしていた。しかしながら、母の強い反対に遭い、当時素直な私は逆らうことができずとうとう不参加。その日はどこにも行かず、ひとりでぷりぷりしていたところ、引き潮にあって行方不明者が出たという知らせが届いた。そのたったひとりの行方不明者が仲良し六人組のひとりであったのだ。夜に遺体が揚がったという知らせで対面した友の顔は、昨日と変わらない美人そのものの彼女であり、初めて号泣した。その後何年間は残りの五人と弔問を続けていたが、お母様の気持ちを考えて止め

にした。夏になると思い出すつらい記憶である。同じ年の秋に、同級の男生徒が白血病で亡くなった。

そして翌年、高校三年生になって間もなくの五月父が急死した。その日、職場対抗朝野球試合があり、監督の父は母に声をかけ出かけたそうだ。登校した私達（妹は高一）に父の訃報が届き母と三人で病院に駆けつけると、父の体には体温がまだ残っていた。チームの勝利に喜び、迎えの車に足をかけた瞬間そのまま前のめりに倒れこんだそうだ。徐々に冷たくなる父をさするしかない私たちであった。友の急死には号泣できても、父の急死に対面しても涙が出なかった。「強い娘」と言われたが、あまりにも突然の深い悲しみには涙が出ないことを後から知った。父の頬に詰める綿を買いに行く途中ぽろぽろと泣けてくる。こんな悲しい目に遭っている私がいるのに、世の中は何事もなかったかのように人や車が通りすぎる。うららかな春のお天気までも私の心を逆なでする。父の死が悲しいより、人生の無常を知って切なくなった。（この原稿を書いている日が奇しくも父の命日）

この三つの身近な『死』を通し、「生きていることだけですばらしい」「有意義に生きたい」「一生懸命生きたい」「自分の人生を大事にしたい」という気持ちが培われたような気がする。しかし自分の生き方が、高校時代の出来事に由来しているとに気づいたのは後年になってからである。

深刻に物事を考えていた毎日ではないし、勉強のことだけを考えていた毎日でもない。それなりに高校生活を楽しんでいた。

なんと言っても楽しかったのは「学校祭」。夜中までの山車作り。仮装行列用の衣装作り。禁止されているのに男生徒は教室に隠れて泊まる。女生徒はおにぎりの差し入れ。

一年生の時の仮装は「こんにちは赤ちゃん」。当時流行った梓みちよの曲に合わせて練り歩く。男子も女子も白い帽子とくるぶしまで隠れる白いロング衣装でよだれかけ付き。てるてる坊主が帽子を被ってぞろぞろ歩く姿は異様であった。かわいい曲が流れているし高一はまだ幼い感じがするので沿道の市民からは大きな拍手をいただく。確か入賞したはず。二年生の時のことは覚えていない。友の死が強烈であったせいか。三年生では「祇園祭？」のようなものだった気がする。私は太い足を出した短パンの法被姿。舞妓姿に女装したH君の姿は妖艶で今でも語りぐさ。キャンプファイヤーを囲んでのフォークダンスは青春映画そのもの。憎からず思っている異性と組む番が早く回ってこないかと期待するが、そんな時に限って曲がひとり前で止まってしまう。露骨に「残〜念」と声を出せるませた生徒はいるが、おおかたは内心の落胆を顔にも出せないでいる古き良き時代であった。今から四十年以上も前の一コマである。

恩師にもユニークな方達が多かった。今の先生達ではとうてい考えられないような先生達ばかりかもしれない。関係者の方達がご存命であろうことを考え、イニシャルにするがそれでも同窓の方は「あ〜あの先生のことだ。」と気づかれるであろう。超有名人の創作ダンス専門体育教師のM女史。何度も体育館の床拭き掃除をやり直しさせられ、なかなか体育の授業本番が回ってこない。体育の苦手な私にとっては拭き掃除の時間の方がよかったともいえるが。そのM女史に褒められ皆の前で創作ダンスの一部を披露したことがある。それは、私の受けた小中高大の体育授業中唯一の評価だったと思う。それから一年の担任であった数学のT先生。ベロと呼ばれ、チョークやぞうきんが教室に飛び交い、数学の時間は緊張する時間であった。指名されるかどうかではなく、とばっちりでチョークやぞうきんが顔にぶつからないように避けることが出来るかどうかの緊張感である。でもこのT先生の指導の仕方は、教員になってから指導法の参考になった。それは数学のテストの採点の仕方。数学の採点だから最終答えが合っていなければ、○にならないのが本来だろうが、途中の計算が合っていると五点でも採点される。つまり、そこまでの努力を認めてくださる姿勢には生徒の時もうれしかったが、教員になってから、『ひとりひとりを大事にする、小さなことでも評価する』という姿勢を学ばせていただいた。

私たちの時代の校舎は一九五六年竣工の建物であったが、一九九二年校舎新築の際、旧体育館解体を見納めしたいと駆けつけたが、やはり最後まで立ち会えなかった。思い出が壊されるようで涙が出る前に退散した。

後輩達には現校舎でそれぞれ思い出作りをしてほしいと願う。

同期会紹介

函館中部高校の思い出

長谷川　光　夫
（第六十九期）

私が函館中部高校に在籍していたのは昭和四十一年四月から一年間である。なぜなら、高校三年になる時札幌から親の転勤に伴い転校してきたからである。一年間という短い期間ではあるが、その後のことを考えると実に有意義な経験を積んだ期間と今になってみれば思える。それは後で述べることにするが、当時の記憶をフィードバックして話を進めてみたい。

季節的には春というものの、津軽海峡からの風が肌寒い四月一日、函館駅に両親と降り立った。その次の日に函館中部高校に出掛け、高校三年の編入試験を受けた。六人ほどの受験者がいたが、私と小樽から来た酒井充君の二人が合格した。酒井君は数学の通称ベロ、豊岡先生の一組、私は英語の少し年をめされた松村先生の二組に所属することとなった。酒井君はその後教育大学を経て教師になったと聞いたが、高校卒業後は会った事がない。果たしてどんな風になっているか会ってみたいと思ってもいるが……

さて、函館中部高校での最初の驚きは校歌であった。いわゆる質実剛健、歌うに連れて意識が高揚してくる、誠に力強い校歌で歴史の重みをひしひしと感じた。「右手に帽子を持って校歌一番、四番」は昔からの函中魂を連想させわくわくしてくる。今でも酒が入るとカラオケのない酒席や家の会合などで、「火柱のはためく峰も年古りて緑の臥牛……」と歌いだす、お気に入りの一曲である。

次の驚きは学校周辺に春ごろから漂うとてつもない臭いである。今は変わったのかもしれないがイカの加工処理場から漂う独特の臭い。これに慣れるのにしばらくかかったが、昔からの函館人には哀愁を感じるものなのかもしれない。中国や東南アジアなどに旅行するとその街々に何とも言えない独特の臭いが篭っていることがあるが、無臭になじんだ日本人にはこうした臭いを大切にする文化とも共存することが必要な時代になったと思っている。その意味でまたあの臭いを復活させても面白いのではなかろうか。もちろん大気汚染の発生などは論外ではあるが……

三番目の驚きは古い校舎の存在であった。現在は校舎の建て替えでモダンな四階建ての建物となっているが、私の在校時は旧制中学時代の古い校舎が、実際に使用されている校舎と併存して存在していた。今から思うと記念文化財一歩手前の建物でもあり、何やら妖怪が出てきてもおかしくないものでもあり、かびくさい異様な臭いのする建物でもあった。旧制中学時代の学生がゲートルか何かを付着し、軍事教練等をしていたことを連想してその建物を見ていたことを思い出す。また、その建物の中の体育館では昼休みにフォークダンスが良く行われておりあまり踊ったことがない私もクラスの女性から申し込まれてフォークダンスに参加して踊ったこともあり、心をときめかせる楽しい思い出となっている。

四番目の驚きは自習時間がやたら多かったことである。高三でもあり、授業に先生方も熱心に取り組んでくれるのかと思っていたが組合活動か、研究活動か、はたまた健康問題か不明であるが、自習と称する時間が多く、監督者不在の中、騒然とするクラスの中で、鬱々と自習していたことが思い出される。高校三年生はもう大人と判断して、自主性を尊重してくれたのかもしれないなーと今の年齢になってよい方向に考えてもいるが。

種々の驚きはあったが、函館にいることで楽しめる思い出もあった。それは春と秋の旅行である。春は松前の桜、秋は大沼の紅葉。昔の国鉄に乗って行く訳であるが、旬の季節の名勝地を見ることができたのは当地にいる恩恵と素直に感動したものである。

また、札幌から転校したこともあり、夏休みに札幌の高校のクラスメートが次々と来函し、函館山や、湯の川のトラピスト案内などで結構忙しかったことだ。その意味で転校してみて友達のありがたみが判ること、在籍しながら高校の比較が同一の視点で見ることができるなど良い点も相応にあることを実感できた。

さて、その後は大学、就

職と年数を重ねていく訳であるが、函館には観光や出張でくることはあっても、勤務等で住むこともなく現在に至っている。

就職した会社（北海道拓殖銀行）が転勤のある職場でもあったことから、この高校での転校経験が大いに生かされることとなる。新しい職場、人間関係に比較的スムーズに適応できること、転勤した土地を「住めば都」といった余裕を持って観察することができること等が利点として挙げられると思うが、一方では転勤に付き合わされる家族からすればかなり迷惑であったかもしれないと今になって思える。

営業部門にいた時は函館や函館中部高校の名前をよく利用する機会があった。最近の物販の案内で「函館中部高校の名簿からコールしています」で始まり、売込みを開始するものと若干類似する箇所はあるが、どこそこの会社に函館出身の役員がいるなどの情報があれば、そこに出掛けて懇意になり、取引を開始してもらうケースが結構あった。その勤務する場所が函館から遠くなればなる程、函館や函館中部高校に愛着を感じるようで、不思議なほど親しみが増し、懇意度が強まるようである。東京勤務時代は武蔵野市内に勤務する函館中部高校の大先輩と懇意になり、二人で飲んで校歌を放吟したこともあった。その他、ニューヨークのマンハッタンでは、後輩である留学生に日本と米国の関係や北海道の将来のありかたなどを偉そうに話したりもした。

最近、転校や転勤を嫌がり内向きの風潮が強くなっているが、こうした経験をポジティブに捉えて対処していけば、仕事を含め人生も楽しくなっていくものと私は思っている。

最後に函館中部高校で同じ釜の飯を食った人たちが先輩、後輩を問わず、学校の絆を大切にして輪を広げていけば、数々の有益なことができるのではないかと大いに期待をしているところである。

真辺雑感

中部高校に思うことなど

見付　ひとみ（第七十七期）

中部高校を卒業して早いもので三十五年。などと人並みに書き始めてはみたが、実は私がまっとうに高校へ通っていたのは高一の時だけである。なぜかというと、一年の時、生涯の師とも言うべきピアニスト宮澤功行氏に師事し、それをきっかけに一八〇度方向転換して、当時の私の実力では考えられない名門・桐朋学園ピアノ科を目指すことになったからである。

度重なる札幌や東京でのレッスンや練習のための欠席で、二、三年次の担任の福地順一先生にはひとかたならぬお世話をお掛けした。卒業を満たすギリギリの出席日数で問題生徒であったにもかかわらず暖かく応援して下さり、演奏会にはお花を持って激励に来て下さった。（そのくせ授業をさぼって、ちゃっかり音楽室で練習しては音楽科の故・大森清先生に「コラッ！」とお目玉を頂いたり……）

そんなわけで卒業時何組だったかも覚えていないし、クラスメートの名前も非常にアヤシイ。

そんな私が三年前、函中同窓会東京支部に来ないかと言うお誘いを頂いた。同期が幹事をやるのでこの機会に集まり、更に一年の時の仲良し七人で赤坂プリンスに泊まろう！と言うことになったのだ。結局、仕事の都合で二次会からの参加になったが、懐かしい顔・顔……。「俺が一番変ったよなー」と、頭髪の少し後退したS君。いいえ、あなたがイチバン高校の頃のまですよ！

学校へ行っていなかったので、私のことなんか皆忘れちゃったよねーと思っていたが、「メグ！（旧姓目黒なので）よく来たね、私の事覚えてる!?」と皆さんに歓迎して頂き、今は外資でバリバリやっているM君から、「目黒さんなんであんなに数学できなかったの？」と古傷をえぐられたりもしたが。

ともあれ学校をこれ以上不可能なほどさぼったかいあって桐朋に合格、なんとかエリート集団（音楽バカ

集団とも言う）に交じって殆ど一日中ピアノ三昧の生活、在学中に文化放送音楽賞を頂き、北海道へ帰ってからは北は利尻から南は函館まで、各地で演奏の機会も与えて頂いた。リサイタルも何度か開催し、オーケストラとも共演できた。夫の転勤や子育てのブランクを経て、二〇一〇年四月、何と二十七年ぶりのリサイタルを旭川木造館と札幌コンサートホールKITARAで開催、おかげさまで好評を得ることができた。

ここでも同期の小松重弘君、奥様の真理さん（旧姓山崎）に大変お世話になった。全道に散らばっている同期の皆さんに宣伝もして頂き、遠く利尻に住む山崎允悠子さん（旧名安倍美比子）からも励ましのFAXが来た。遠路はるばる大山貴子さん（旧姓堀田）が会場にかけつけて下さった。福地先生も来て下さった。（ちなみに先生は道立拓北高等学校校長を退職され、札幌予備学院・朝日カルチャーセンターで教べんを取られた。石川啄木研究で日経新聞にも登場。「杜甫・李白・白楽天その生涯と作品」を鳥影社より上梓、また昨年は「文芸思潮」現代詩賞千三百余編の応募の最優秀に選ばれている。年を経ていよいよ輝く先生の姿に心も熱くなる。）

今年の九月五日には函館芸術ホールで演奏することになっている。中部高校音楽科講師として勤務されていた、私の中学一年から大学受験まで師事した布施谷信子先生の主宰されているピアノ教室「アカシア会」の創立五十周年記念コンサートである。とても楽しみ！

学校は卒業してしまえば終わり、と思ったこともある。が、こんな不マジメ生徒の私も、函館中部高校の空気を吸った、ということに時折心の中が何やら暖かくなってくる事がある。優しい函館の風土の中で函中が生み出して来た幾多の人・人・人……

私の現在教えている全日本ピアノ指導者協会の生涯学習講座の生徒さんにも函中の大先輩が幾たりかおられる。また趣味でしている茶道（遠州流宗家）でも、函館出身、という方に「もしや学校は……」とおたずねすると、ニコッと微笑まれて「函中六十期ですよ。」

ホント、悪いことなどできないのである。どこでも函中の先輩・後輩の活躍を見ることができる。そういえば昨年の同窓会でお会いした「百期です。」という目のくらむようなフレッシュな好青年、何と弁護士をされているT先生。これで離婚も大丈夫！なんちゃって。

私も結婚して二十六年（うそー！）、二人の子供も社会人となった。いよいよこれからが人生の正念場である。あくまでも主軸はピアノなので練習が生活のかなりの部分を占める。本番（演奏会）のあるなしにかかわらず、レパートリーの整備と新しい分野の開拓のため、多い日は四～五時間、少ない日でも二時間は必要になる。茶道も今年四月に宗号（茶名）を頂くことができ、別にどう変わったという事はないが、自分の中ではある種の責任感が芽生えてくる。その他にも北海道神宮で月一回催されている「札幌興風会」で短歌を詠む。その流れで短歌結社「原始林」にも入会したのでこちらも青色吐息で毎月の宿題をこなさなければならない。茶道に関連して習字のけいこもある。お香やお花など、勉強したいことは果てしなくあるがもう私の能力ではムリ。これ以上店を広げるなと娘にも厳命されている。おかずがこれ以上貧弱になっては困るのであろう。

三年前同期会東京ツアーの翌年は京都で同期七名が集まった。今年は十一月に鎌倉行きの予定である。皆仕事を持ち、家庭の切り盛りをしながらキャリアを積み重ねている。一年おきのプチ同期会は、十代だった自分をかろうじて思い出させてくれる貴重な機会である。末永くこのメンバーで集まれるよう願っている。

末筆ですが、函館中部高校の更なる発展と同窓の皆様方のますますのご活躍、ご多幸を心よりお祈り申し上げつつ、このつたない文を閉じさせて頂きたいと思う。ありがとうございました。

〔写真は、二〇〇九年四月二四日札幌コンサートホール「KITARA」での見付ひとみピアノリサイタル〕

平成21年度収支計算書

収入の部	
科　目	金　額
前年度繰越金	2,275,097
年　会　費	426,000
終身会費	150,000
総会懇親会費	332,000
雑　収　入	40,000
預金利息	776
収入合計	948,776
収入の部合計	3,223,873

支出の部	
科　目	金　額
総会懇親会費	281,500
講演会費	50,000
印刷費	238,515
通信費	207,684
旅費交通費	80,800
会議費	62,386
事務費	20,777
振替手数料	26,200
雑　費	44,727
支出合計	1,012,589
次年度繰越金	2,211,284
支出の部合計	3,223,873

講演会

白楊ヶ丘同窓会札幌支部第30回定期総会・懇親会

平成22年６月18日㈮　午後６時／札幌第一ホテル

「山の愉しさ、怖さ」

講　師　　**長谷川　雄助** 氏

講師のご紹介

ご略歴

1954年３月	函館中部高等学校卒業（第56期）
1954年４月	北海道警察官拝命
1965年	社団法人日本山岳会　入会
1969年	北海道警察山岳遭難救助隊（79年除隊）
1994年２月	枝幸警察署長を最後に退職
2002年	ＮＨＫ文化センター新札幌教室　登山講師（現在）
2006年	㈳日本山岳会北海道支部長就任（2008年辞任）

函館中部高等学校校歌

作詞　函館中部高等学校教諭　藤原直樹
作曲　函館中部高等学校教諭　酒井武雄

一、火柱のはためく峰も
年古りて緑の臥牛
宇賀の浦風の砂山
波よせてくずれ流るる
見よや物なべてうつろふ
窮みなし流転の相

二、北の国雪深けれど
その底には草は芽ぐめり
野山荒れ鳥潜めども
やがて来ん春の光に
万象の蘇る見よ
ここにあり不滅の生命

三、白楊のささめく丘辺
秋深き梢仰げば
冴え渡る銀河の彼方
幽けくぞ星雲燃ゆる
胸に満つ久遠の思ひ
遙かなり真理の彼岸

四、限りなき流転の中に
生命あり不滅の学び舎
聞けや今窓の外遠く
新潮の入りくるひびき
よしさらば若人われら
踏まんかな希望の門途

函館中学校校歌（同窓会歌）

作詞　第二高等学校教授　土井晩翠
作曲　東京音楽学校教授　岡野貞一

一、玄冥の北の一道
関門の岸に臨みて
青春の薫にしるく
基おく育英の場

二、集い寄る千余の子弟
人生の花の綻び
身を鍛へ心を練りて
向上の一路を辿る

三、宇賀の浦万頃の水
駒が岳千仞の山
微を積みて高きに至り
滴より空をもひたす

四、形ある無言の教
仰げ我が紅顔の子等
業成らば双の方の上
興国の運も負へかし

五、母校の名子弟の誉
花と香と常に伴ふ
任重く道の遠きを
嗚呼健児勉めざらめや

編集後記

◇昨年から長年編集に携わっている長谷川先輩のお手伝いをさせてもらっている。といっても自分では何もできず、指示をこなす事で精一杯だった。今年はそんな私を見兼ねたのか、冬の幹事会の後ある所に呼ばれた。入念な打合せをした後でグラスを傾ける。春、幹事会の後、また編集会議。どうやら会議は多いみたいだ。賑やかな部屋は嫌いではないので、この日も議論は弾んだ。お陰様で大体の段取りは覚えた。◇原稿依頼を先輩がして下さり、受取・校正を私が行った。依頼者と確認者が違ったので、執筆者の皆様には戸惑いを与えてしまったかもしれない。ご協力に感謝致します。◇二校、三校は一人で行わざるを得なかった。至らぬ点が多々あると思う。この場でお詫び申し上げ、また皆様の忌憚のないご意見を頂戴し、次回に生かしたい。◇先輩、長い間お疲れ様でした！（一〇一期　佐藤）